

登場人物

おじいさん

孫

おじいさんの若い頃（漁師）

キツネ

キツネの家族とか村人とか

おじいさんが帳面をつけている。

孫がやってくる。

孫 おじいちゃん、遊んでよ。

おじい おや、お昼寝は終わりがい。おじいはちょっと忙しいんだ。お兄ちゃんと遊んでもらいなさい。

孫 お兄ちゃんは南工（南陽工業高等学校）に部活の練習行ってるの。

おじい そうか。じゃあ、お母さんと遊んでもらいなさい。

孫 お母さんはアルクにお買い物も行ってるの。

おじい そうか。なら、お父さんは。

孫 お父さんは徳山ボートレースに行っちゃった。

おじい ばあさんはおるだろう。

孫 おばあちゃんは下松健康パーク。

おじい ……。

孫 綾小路きみまろが来てるからって。

おじい そうかそうか……。しょうがないな。じゃあ、この帳面をつけ終わったらね。  
孫 うん。

孫はおじいさんの帳面付けを見ている。

孫 おじいちゃん、それ、きれいだねえ。

おじい この筆かい？ そうだろう。これはおじいが一等大事にしている宝物なんだ。

孫 いいなあ、私も欲しい。

おじい そうかそうか。でもな、この筆だけは、まだあげられないんだ。これはね、昔おじいさんが貰ったものだから。

孫 もらったものなの？

おじい そうだとも。うんと昔にね。じいさんがまだ若いころ、ばあさんがピチピチの娘だったころのことだ。徳山の港町に、それは男前な漁師がおってな。

若い頃のおじいさん（漁師）が出てくる。

孫 男前な？ 誰？

おじい わしじゃよ。

孫 ……。

おじい 漁師の男前っぷりはすごいもので、朝方漁から戻ると、港に娘がわんさか待っているほどじゃった。「握手してください！」「サインください！」なんて言われとったもんじゃ。

孫 ……。

おじい 漁師がくると一回りすると、娘らはキヤーキヤー騒いだもんだ。その中におったのが若かったばあさんだっただが、ばあさんとわしのラブストーリーはここからはじまって…

孫 おじいちゃん、それでその筆は誰からもらったの？

おじい うん。漁師は商いもやっておった。漁でとれた魚を、山の村に売りに行くんじゃ。鹿野やら夜市の方に行つては、山菜や小判と交換しておったんだな。

ある日、いつものように魚をかついで山道を歩いていると、

木に隠れてキツネが様子をうかがっている。

漁師 おや？

おじい 木に隠れた小さな影を見つけた。

漁師 あれ、子どもかな。

おじい 影をよーく見ると、頭に小さい山が二つ、生えておる。それに、木の反対側から、扇のような影も見える。

漁師 あ、ありや、子どもは子どもでも、キツネの子だ。ここいらの山には「周南のいろはギツネ」というのがおって、道行く人を化かしに来る、そういう話を聞いたことがある。わしは出会ったことはないが、ハハア、こいつがそうか。

おじい そう思つて、わしはわざと大きな声で歌いながら歩いた。

漁師・おじい （歌を歌う）

おじい キツネはその様子を見て、

キツネ おいらは兄弟の中でも化かすのは一等巧い。しかし、あんなに威勢の良い男を化かしたことなくないなあ。うーん、仕方がない、一旦様子を見るだけにするか。

おじい と、こうなったそうだ。

漁師 (歌いながら様子を見て) よし、上手くいった。なんだ、化かし上手のキツネと言  
うのも、大したことはないじゃないか。それにしても、やけに小さい影だったな。  
わしが聞いていたキツネと言うのは、オトナの女ギツネだったと思うんだが。おか  
しいな。

おじい そう、このキツネ、実は噂のキツネではなく、その子供だった。

孫、母親ギツネに変わる。

キツネの家族登場

おじい 数日前、母親ギツネが怪我をして、狩りに出られなくなった。少しの間は良かったものの、だんだん食料は底をつき始める。

キツネ 困ったなあ。おつかあの具合はまだ良くないし、かといって弟や妹は腹をすかしている。おいらはまだ狩りもうまくできないし。

キツネの弟 兄ちゃん、ご飯はまだ？

キツネの妹 兄ちゃん、おやつはまだ？

キツネ うーん、仕方がない。よし！ 一番上のおいらが、ちよいと人を化かして食べ物  
をくすねて来よう。(弟と妹に) ちよつと、兄ちゃんは出てくるから、留守番頼ん  
だよ。

キツネの母親 すまないねえ。でも、大丈夫かい？

キツネ 大丈夫！ おいら、兄弟の中では一番「つまむ」のが巧いんだ。チョチョつと、  
柿か栗でも取ってくるよ。

キツネの母親 そうかい？ 化けの皮が剥がれないように、よく気を付けるんだよ。  
おじい と、こういうわけで、子ギツネはやってきたらしい。

母親ギツネは、自分の着ている衣を子ギツネに渡す。

キツネの家族退場。

おじい とはいえ、まだ幼い子どもだから、威勢の良い大人の男にはどうしても立ち向か  
えなかった。

キツネ きつと、あの漁師は今から商いをして、帰り道にはいい気分になっているに違  
ない。油断しているところを「つまんで」やるぞ。

キツネ退場。

おじい さて、わしはと言えば、商いの方はすっかりうまくいった。山奥の村人たちは魚

が来るのを首を長くして待っていたから、漁師が来るといつも大喜び。また男前の漁師が来るとなると、若い女は皆、化粧に着物に選りすぐって、朝からそわそわソワソワしたもんだ。その男前の漁師が誰だつて？ わしじゃよ。坂道を登ってくるわしの頭の前が見えてきたら、そりやあもう山彦も手に負えない数の歓声が響き渡つてだな……え？ 先に進める？ そうかそうか……。とにかく、村の人々は、持ってきた海の幸に見合う山の幸をどっさり抱えて籠に入れてくれた。それから飯や酒をふるまってくれて、まだ日の高いうちから宴会騒ぎだった。わしも行き路に見たキツネのことなんかすっかり忘れて、飲んで飲んで食べた食べた。日が大分西に傾いたころ、

漁師 あ、いけねえ、もうこんな時間だ。そろそろ、お暇します。

おじい わしはずっしり重くなった籠を背負つて、来た道をまた歩きだした。

漁師 やれやれ、こいつは重いなあ。しかし、今日はまた、一段と繁盛した。お袋も兄弟もきつと喜ぶぞ。

おじい いい気分で帰っていると、

漁師 あれ、

おじい ふと、目の前に誰か立っている。

漁師 はて、誰だろう。

おじい ちょっと近づいてみると、それは若い娘だった。しかもたいそう美しい。モテモテだったわしも、ちょっと見惚れてしまいうくらいだった。

漁師 娘さん、こんなところで何をしている。

娘 へえ、私はこの山の奥で暮らしておりますので、帰り路を歩いておりました。

漁師 山奥の？ あの村にこんな娘がおったかな。

娘 へえ、私はあの山奥の村のさらに奥に住んでおります者です。

漁師 村のさらに奥に？ はて、そんな辺鄙なところに人なんて住んでおったかな。

おじい わしは不思議に思ったが、娘は神妙な顔で頷くばかり。

娘 へえ、辺鄙なところに暮らしております者です。お兄さんは？

漁師 俺は、この山を下りた先のモンだ。そこで魚を獲つては、山の村に売りに行くんだ。

娘 重そうな籠ですますねえ。

漁師 ああ、今日はええ商いじゃった。

おじい 娘はにっこり笑った。

漁師 どれ、この柿をひとつ、食わしてやろう。

おじい わしは柿を一つ、娘にやった。

娘 まあ、ありがとう。

おじい 娘は喜んで受け取ったが、そのまま懐の中に入れてしまった。

漁師 食べないのかい？

おじい わしが尋ねると、

娘へえ、私には弟と妹がおります。その子たちが腹をすかして待っているのですが、今日はなんにも持って帰れない。だから、これを食べさせてやろうと思つて。

漁師 そうかい、そうかい。そりゃあいけねえな。なら、ほら、妹と弟の分もやろう。

おじい わしは、芋をふたつやつた。娘はまた喜んだが、これも懐に入れてしまった。

漁師 食べないのかい？

娘へえ、実は、私には母がおります。数日前足を痛めまして、家から出るのも難しいのです。だからこれは、母に食べさせてやろうと思つて。

漁師 そうかい、そうかい。優しい娘さんだ。よし。これもやるよ。

おじい 今度は粟を4粒やつた。あんまりにも気前よくもらったものだから、娘はちよつぱり気が抜けたんだろう。

娘 ありがとう、お兄さん。

おじい ペこり、とお辞儀をした拍子に、頭から小さな山がふたつ、ひよっこり出てしまつた。

漁師 やや、この娘、頭に黄色い耳を生やしとる。えらくべつぴんさんと思つたら、行き路に見たあの子キツネが化けておつたか。しかし、こんな下手な化け方をするつてことは、こいつはあの「いろはギツネ」じゃあなさそう。もしや、例の女狐の子どもだな。

おじい 娘の正体には気がついたが、わしもその時はいい気分酔つておつた。男は大概、綺麗な娘に弱いものだ。それに、わざわざ子どもが騙しにくるんだ。母キツネは本当に怪我でもしておるんだろう。少し可哀想にも思えてきた。娘がまた粟を懐にしまうので、わしは気がつかないふりをして、

漁師 食べないのかい。

おじい 同じ調子で尋ねた。

娘へえ、私にはじいさまもばあさまもおるものですから。

漁師 そうかい、そうかい。あと何匹、いや、何人、いるのかね。みんなの分やろうじゃないか。

おじい すると娘は喜んで、

娘あと、母の姉夫婦とその子どもたち、弟夫婦とその子どもたち、ペットの猫と犬と鶏、ハムスターとインコがおります。皆腹をすかして待っています。

漁師 そうかい、そうかい。分かつた。これ全部持つて行け。食わしてやれ。

娘 いいの？ 本当に？

漁師 ああ、やる、やっちゃろう。

おじい わしはついに、持っている食料も全部娘の前に置いてしまった。娘は大層喜んだ。娘 わあい！ おつかあが喜ぶなあ。弟と妹が喜ぶなあ。

漁師 そうだろう、そうだろう。だから、いいか、お嬢さん。家族を大事にするんだよ。娘 うん！ そうだ、これ、お礼にどうぞ。

おじい 娘は小さな巾着袋をくれた。持ってみると、ずしっと重い。

漁師 なんだろう、これは。

おじい そっと開けてみると、驚いた。小判がぎっしり入っているじゃないか。籠の中の食べ物全部売っても、こんな額にはなるまい。

漁師 お前、これどうしたんだ。

娘 おつかあ、いや、母が、いつも持たせてくれはるんです。お礼に差し上げます。

漁師 そうか。え、こんなに？ そうかそうか。よし、よし、お嬢さん、気を付けて帰るんだよ。お母さんによろしくなあ。

娘 へえ、こちらこそ、ありがとうございます。

おじい 娘はお辞儀をして走っていったが、途中から4本脚で駆けていった。子ギツネのよほどうれしそうな後ろ姿は可愛いもんだった。

漁師 軽快、軽快。すっかり身軽になっちまった。まあでも、懐の巾着袋が重いから、良しとしようじゃないか。

おじい わしもまた、いい気分の家へと歩き出した。調子よく山を下っていたが、その日は朝早くから働いていたし、酒も飲んだ。遠石の辺りで

漁師 ちよっと一休み……

おじい ……するつもりが、ぐーすか寝てしまった。目を覚ましたのは、明け方のこと。

漁師 いかん、寝てしまった。昨日はさすがに飲み過ぎたなあ。(籠を見て) あれ、山菜がない……あ、そうか。あのキツネ娘に全部やってしまったんだ……。まあでも、代わりに小判をもらったんだったな。

おじい いそいそと、巾着袋を出してみると、

漁師 あれ、

おじい いやに軽い。

漁師 も、もしかして……

おじい 慌てて中身を見てみると、

漁師 あっ

おじい 中には小判なぞ一枚もない。代わりに、木の葉がぎっしり入っているじゃないか。漁師 やられた。子ギツネにつままれてしまったあ。ああ、お袋なんて言おう、兄弟にどうやって謝ろう。(しよんぼり)

おじい 一方その頃、山では子ギツネが意気揚々と住処に帰ってきた。山のような食べ物に、母ギツネはびっくりしたそう。

キツネの母親 まあ、どうしたんだい、そんなにたくさん。

キツネ おいらが取ってきたんだよ。どうだい、おつかあ、おいらも立派に「つまみ」をやったのけたんだ。

おじい そう言って胸を張った子ギツネから耳が飛び出ているものだから、母ギツネは余計に仰天。

キツネの母親 お、お前、その姿で人間にあったのかい？

キツネ そうだよ。巧く化けられているだろう？ 漁師のお兄さんにちよちよいと寄っていったら、別嬪さんだと言って、ぜーんぶくれたんだ。

キツネの母親 まあ、まあまあ……

おじい 事情を察した母ギツネは、子供にこう諭したそうさ。

キツネの母親 いいかい、坊や。頭を触ってごらん。

キツネ (耳が出ていることに気がついて) あっ

キツネの母親 あの漁師はお前の正体に気づいていたんだよ。だけでも、子ギツネが人間に、しかも大人の男に向かってつまみに来たものだから、情けをかけてくれたんだ。漁師は、お前を助けてくれたんだ。だけどね、その漁師にも、母や、兄弟がきつという。今頃、漁師さんの家族がお腹を空かして困っておるよ。海や山の幸は、キツネも人間も、どんな動物も、皆が必要としているんだ。独り占めしたり、必要以上に取ったりしてはいけないよ。

おじい 母ギツネの言うとおりだった。すっからかんの籠を見た家族は困り果てた。次の漁まではまだ日があるし、金もない。少しは食料もあるものの、数日で底をつくのは目に見えとつた。

漁師 参ったな。どうしよう。

おじい いくら男前のわしでも、稼ぎが無ければ意味がない。女っていうのはまた、男を顔だけでは許さないもんだ。金のない男前には興味がないと言わんばかりに、とんと寄って来なくなつた。そんな中、様子を見に来てくれたのが若かつたころのばあさんでなあ。一等美人と言うわけではなかつたんだが、堀の隅からそつと様子をうかがってくる姿は可愛らしいもんだつた。わしも落ち込んでおつたから、余計にありがたくて、そこからわしとばあさんのラブストーリーは佳境を迎えるんだが……あ、別にいい？ そうかそうか……。とにかく、そんなわしの様子を、子ギツネもそつと見に来たそうさ。

キツネ しまつたなあ、やりすぎた。あんなに困らせるつもりはなかつたんだがなあ。これは、何かお返しをしないと申し訳が立たないや。

おじい 子ギツネは考えた。

キツネ そうだ、人間は「筆」というのを使って、商いのつじつまや日々の出来事を残しておく、おつかあに聞いたことがあるぞ。

おじい 子ギツネは、大急ぎで山に駆け戻り、丁度いい木の枝を見つけてきた。枝を綺麗に削り、それから、自分の毛を一本ずつ抜いては、枝に巻きつけていった。

キツネ 漁師の竿は 一等強い 大きな魚も どんどん獲れる

漁師の餌は 一等美味い グルメな魚も どんどん食いつく

漁師の魚は 一等人気 小さな魚も どんどん売れる

おじい 山奥からは、そんな歌が聞こえとつたそうさ。ある日の明け方のこと。わしが布

団でぐーすか寝ておると、何やら外で物音がする。

漁師 なんだ？ もうこの家には、盗めるものなぞ、ひとつもないぞ。

おじい 訝しんで、そつと戸を開けてみると、

漁師 あれ、なんだ？

おじい 魚を運んでいた、いつもの籠が置いてある。中を覗いてみると、

漁師 あつ、芋に柿、栗、これは大根じゃないか。

おじい 山の幸がどっさり置いてある。そしてその上にちよこんと、一本の筆が添えてあった。筆の毛は朝日を浴びて、金色に輝いておる。何とも言えない美しさだった。

漁師 なんと綺麗な筆じゃ。そうか、あの子ギツネが作ってくれたんだな。それに、こんなに山の幸がたくさん。有難い、有難い。

おじい その時のわしの嬉しさと言ったらなかった。わしは筆を大切に使った。その後も、漁に行くと、魚はわんさか獲れる、高く売れる。わしの人気も復活・急上昇だった。若かったばあさんとの結婚生活も安泰、子供にも恵まれた。

漁師 わしは子ギツネを助けてやったが、今度は子ギツネに助けられた。これは、わしも礼を返さんといかん。

おじい それから、わしは獲れた魚や、交換した山菜を少しずつ、山奥に置いて帰った。すると、キツネの方も、栗や、柿なんかを、家の前にそつと置いていくようになった。わしとキツネは、同じ生きる者として、互いの糧を分け合うようになったんだな。その絆の証が、この筆だ、と言うわけなんだ。

孫、いつの間にかまたおじいさんの傍に座っている。

孫 おじいちゃん、そのキツネさんとは、まだご飯を分け合ってるの？

おじい いいや、だんだんと回数がへってきて、やがて、途切れてしまったよ。わしが年を取ったように、あのキツネも老いたんだろう。

孫 でも、その筆はずつとずーつと、大切に使っているんですすね。

おじい そうじゃよ。この筆は、わしとあのキツネの、一緒に生きた証だからね。そして、この筆を子どもや、お前たち孫に繋いでいくのが、わしらの役目でもあるんだよ。

孫 時代が変わっても、ずつと、人間やキツネや、他の動物たちと、糧を分け合う証なんですよ。おじいさん、ありがとうございます。

おじい そう。……あれ？ お前、ありがとうございます、なんて、なんだか喋り方がヘンテコだね。まるで、あのキツネ娘みたいだ。

孫、ニコリと笑い、一礼する。すると、頭からキツネの耳がびよこん、と出る。

おじい あっ

孫 化かしてごめんなさい。私、おじいさんに助けて頂いたキツネの孫娘でございます。先日、うちの祖父が亡くなりました。祖父はずうっと、おじいさんのことを話しておりました。最近のご飯を置いていくことも出来ませんでした。このご恩は、孫の代までずっと忘れずにおります。おじいさんどうか、お元気でいらしてくださいね。

孫キツネ、一礼して、走り去っていく。

おじい なんと、あのキツネの、孫……。そうか、あのキツネ、ずっと忘れずにいてくれたんだね。しかし、娘と思っていたら、坊主だったんだなあ。そうかい、そうかい……。

おじいさん、笑う。

奥から、本当の孫の声が聞こえてくる。

孫 おじいちゃん、おはよう。

おじい ああ、よく寝とったねえ。おはよう。

孫 ねえねえ、遊んでよ。

おじい はいはい、今いくよ。

おじいさん、奥へ去っていく。

おしまい。

ユニット・ピコ 「子ぎつねの筆」

2018年 11月17日（土）

周南市 老人休養ホーム嶽山荘

「子ぎつねの筆」

脚本：中野志保

装丁：中野志保

発行：ユニット・ピコ

MAIL [unitpico@gmail.com](mailto:unitpico@gmail.com)

※ 上演希望の際は、必ずユニット・ピコまでお問い合わせください。